

学生海外調査研究	
父親の IT 利用と子育て参加・夫婦関係に関する研究発表と調査	
佐々木 卓代	
ジェンダー学際研究専攻	
期間	2011 年 11 月 16 日～2011 年 11 月 21 日
場所	アメリカ フロリダ州 オーランド
施設	全米家族関係学会第 73 回大会（NCFR）Rosen Centre Hotel

内容報告

1. 本研究に至る経緯

報告者の研究テーマは、社会的に重要視されている父親の子育て参加促進要因を父親の属性や夫婦の関係性、職場要因、父親アイデンティティなどの視点から解明することである。また、IT が普及している社会において、父親の IT 利用が子育て参加や夫婦のコミュニケーション、夫婦の関係性に対してどのような影響があるのかを明らかにすることである。報告者は、これまでの研究で、父親が子育て参加することで、子どもの自己受容感を高めること（佐々木、2009a）、父親に対する親和性を深めること（佐々木、2009b）、父親自身の成長を促し、子どもの父親評価を高めること（佐々木、2010）、父親の過干渉的養育態度は、間接的に子どもの有能感を弱めること（Sasaki, 2011a）などを明らかにし、査読論文や学会等で発表を行っている。さらに、夫婦の愛情関係や子育てにおける協力的関係が、父親の子どもに対する支援的意識や子育て参加行動を増加させ、子どもの有能感や自己受容感、父親への親和性や評価などを高めることを明らかにし、父親の子育て参加における夫婦関係の重要性を示唆している。

さらに、石井クンツ昌子教授が代表を務める科研費研究会Ⅰ（「IT 社会における育児期のインフォーマルネットワークと世代間関係：日米比較から」科学研究費補助金基盤研究 C 課題番号 19500647）が収集した 2009 年母親調査データ（有効回答者数 524 人）を分析し、育児期の母親の IT 利用による夫の子育て参加や夫婦関係良好度に対する影響を明らかにし、母親の子どもに関する夫との IT 利用が夫の子育て参加を促進し夫婦関係満足度を高めること等に関して（2011b）、学会発表や研究成果報告書執筆などを行っている（2009 年 9 月日本家族社会学会第 19 回大会「育児期の母親の IT 利用と夫婦関係」：同年 11 月 National Council on Family Relations（以降 NCFR と記述）71 回大会（サンフランシスコ）“Marital Quality and Communication, and the Internet Use in Japan”：2010 年 10 月日本家政学会家族関係学部会第 30 回セミナー「育児期の母親の IT 利用を媒介とする父親の育児・家事参加と夫婦関係」：同年 12 月京都大学 GCOE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」The 3rd Next-Generation Global Workshop “Japanese Mothers with Young Children and Internet Use: Husband' Child Care and Housework, and Marital Quality”）。

また、同教授が代表を務める科研費研究会Ⅱ（「情報社会における育児期の親の IT 利用と家族関係：日米比較から」科学研究費補助金基盤研究 B 課題番号 22300246）が収集した 2011 年父親データ（有効回答者数 475 人）を分析し、父親の子育てに関する IT 利用が夫婦のコミュニケーション時間を増加させ、夫婦関係良好度や子育て参加促進に対して有効に作用していることなどの学会発表を行った（2011 年 9 月日本家族社会学会第 21 回大会「育児期の父親の IT 利用と父親アイデンティティ・夫婦関係良好度」）。以上から、博士論文執筆にあたって、父親の子育て参加と夫婦の関係性の視点は欠かせないものとなっていること、IT と家族の研究においてはアメリカが進んでいることから、海外での研究動向や調査の必要性があると考えた次第である。

2. 海外調査研究の必要性和目的

日本で実施されている夫婦の関係性を測る尺度は、海外の研究者の文献などから項目を採用して日本に合うように修正した尺度が使用されている。すなわち、夫婦の関係性の観点による父親の子育て参加研究は、欧米の方が盛んに行われているため、先端の研究課題を把握するためには、海外における調査は不可欠で必要性があると考えた。また、IT の普及や利用は、アメリカにおいてかなり進歩し

ているため、父親の IT 利用と子育て参加研究の動向をアメリカにおいて調査する重要性と必要性が高いと判断した。

さらに、2009 年 11 月 NCFR 学会発表（前述）と 2010 年 11 月 The 5th International Conference in Applied Ethics at Hokkaido University における “Parental Involvement and Children’s Perception of Competence: From Gender Perspectives” の発表、並びに 12 月京都大学 GCOE 主催の The 3rd Next-Generation Global Workshop（前述）での発表において、海外の研究者から、父親の子育てと夫婦の関係性に対する質疑、IT 利用と夫婦関係良好度の研究においても、夫婦の関係性の視点について活発な質疑が出された。よって、本報告者は、博士論文において父親の子育て研究と夫婦の関係性を重要視していることから、NCFR 学会で研究発表を行うことで夫婦の関係性の視点を確認することと、学会での質疑応答から今後の研究の方向性のヒントを得ること、また、同分野における海外の研究を調査する必要があると判断した。

そこで、本調査の目的は、夫婦という単位や関係を特に大切にするアメリカの学会において、父親の子育て参加と夫婦関係の視点、家族や親子の関係性における研究動向、また、IT 利用と家族、夫婦、親子関係に関する国際的な研究動向などを調査することであった。また、多国の研究者が多数参加するかなり質の高い国際的な学会なので、学会期間中は、アメリカや他国の男性の子育てと夫婦の関係性の研究の現状や IT 利用の研究状況を調査するために、積極的に発表やシンポジウム、ポスター発表等に参加して、質疑応答をすることと、他国の研究者と交流し、情報や知見を深めることも目的の一つとして設定した。そして、アメリカにおける家族に関する多様な視点からの研究を調査することで、本報告者の博士論文のテーマとしている父親の子育て研究の執筆や研究を深めることにつながることも本調査の目的として定めた。

日本においては、NCFR の学会のように、多国の多数の研究者の発表を聞いて勉強できる機会はなかなか得られないので、父親の子育て参加に関する諸外国の現状や問題点の把握、父親の子育てに関する IT 利用の諸外国の情報を得ることが可能であろうし、今必要とされている父親研究の課題を発見することにもつながると考えた。日本においても海外においても、IT 利用が父親の子育て参加にどのような影響があるのかを解明している研究はほとんど見当たらないので、NCFR の学会参加により、IT 利用による家族関係、親子や夫婦の関係への影響など、今後の父親研究の課題発見につながる事が予想され、日本の父親の子育て参加研究の発展に貢献する意義があるとも判断した。

3. NCFR（全米家族関係学会）第 73 回大会における研究発表と研究調査の概要

3.1 研究発表の概要

今回の NCFR 学会において、石井クンツ昌子教授の科研費研究会Ⅱのメンバーは、2011 年 2 月に収集した父親データをもとに、シンポジウム形式でそれぞれの研究発表を行った。シンポジウムの題目は、“The Use of the Internet and Fathers’ Family Involvement in Contemporary Japan” であり、その中で、報告者は第 4 番目の報告となる“The Impact of IT Use on Co-parenting, Marital Relationships and Networking : A Case of Japanese Fathers” の中で、父親の IT 利用と Marital Relationships の箇所を担当して発表を行った。

本報告者の分析の結果、父親がインターネットを利用する時間が多いほど、子育てに関連する情報を有意に多く収集しており、その中でも、子育ての情報やゲームなどの収集にインターネットの利用頻度が多い父親は、妻との会話時間が長いということが明らかになった。さらに、その夫婦の会話時間は、夫婦の良好な関係性を高め、子育てに関して両親やきょうだい、友人などの社会的なネットワークとの対面によるコミュニケーション頻度も高めることが判明した。そして、夫婦の良好な関係性や子育てに関する社会的なネットワークとの対面によるコミュニケーションが、直接的・間接的に父親の子育て参加を高める効果があることが示唆された。このように、日本における育児期の父親の子育てに関するインターネット利用が、夫婦の良好な関係性を高め、父親の子育て参加を促進することを研究成果として発表した。

全てのメンバーの研究発表を終了した時点で、シンポジウムの聴衆者との質疑応答に移ったが、本報告者の発表に関する内容の質疑応答のみ報告させて頂くことにする。まず、最初に、父親の IT 利用と夫婦の関係性において、良い結果のみの報告となっているが、ネガティブな影響の面はなかったのかどうかの質問があった。この点に関して、報告者は、父親データの分析においては、IT 利用と夫婦の関係性にネガティブな影響は出ていなかったこと、ただし、2009 年に石井クンツ昌子教授の科研費研究会Ⅰで行った母親データの分析においては、母親の携帯利用時間が長いほど、夫婦の愛情関係は低いという結果になっていたこと、よって今後も IT 利用と夫婦の関係性に関しては、丁寧な分析を行っていく必要があるとの回答を行った。

次に、インターネットを長時間行っている父親は、家族というより外に関心が向いているイメージ

が強く、子育て参加を多く行っていることや夫婦の関係性が良いとのイメージが結びつかないとの質疑があった。この質問に対して報告者は、父親データの分析結果がそうなる理由を、調査対象者の父親が、子育てに関する情報検索、例えば、子どもを遊びに連れて行く際の施設の内容の確認や交通手段、また、子どもを遊ばせるためのゲームなどをダウンロードすることに一番多くインターネットの利用時間や頻度が多い父親たちであることを理由にあげた。それゆえ、子育ての情報検索目的の使用が、夫婦の会話時間を高め、夫婦の関係性を良好なものにしているとの説明を行った。また、妻以外の社会的なネットワークの対面頻度を高めることに関しても、子育てに関しての対面会話頻度を質問した上での分析結果であることも加えて説明した。アメリカの学会発表であるだけに、夫婦の関係性に対する質疑が多く出され、IT 利用と夫婦の関係性の研究の意義を実感することにつながり、大変勉強になった発表の場であり、質疑応答であったといえる。

3.2 研究調査の概要

3.2.1 IT 利用と家族に関連する研究の概要

Technology Use in Families のセッションにおいて、コンピューターを介するコミュニケーションとカップルの先行研究をまとめる形で研究報告があった（“Couples Use of Technology for Communication: Functions and Future Directions,” presented by Perry, M. S. University of Kentucky）。コンピューターによるコミュニケーションは、基本的に対面や声による相互作用ではなく、社会的・非言語的なものが欠落しているとの前提に立ち、カップルの関係維持に機能し、特に配偶者にとっては、緊急時、ストレスや必要性を感じている時に重要なものであること、軍隊にいるカップルにとっては、配属されている間の関係維持とコンタクトのために不可欠のツールであることが報告された。これらの研究で使用されている理論として、アタッチメント理論と関係弁証法的理論を用いていることも興味深かった。

また、離婚後の家族においてとりわけ対面でのコンタクトを維持することが難しいゆえに、離婚後も子どもを養育する親と、親と同居していない子どもに対するインタビュー調査の二次分析を行った研究報告があった（“Reflections on Technology use in Post-Divorce Families,” presented by Feistman et al. University of Missouri）。それらの親と子どもは、携帯電話やメールなどに対する恩恵と欠点に対して違う認識を持っていたが、家族のメンバーの親密さを維持することに IT 技術が助けになっていることを認めているというものであった。

次に、一人親の方が、二人親の家庭よりも報酬として子どもにより多くメディアを使用していること（“Media and the Family: Current Trends for Media Use, Monitoring, and Connection,” presented by Coyne et al. Brigham Young University）、親のオンライン活動は、環境理論から様々に異なった資源の必要性によって 5 つにグループ分けられ、とりわけ収入によってその活動状況が違うことが報告された（“Digital Divides: An Examination of How Parents' Technology Use Differs by Income,” presented by Doty et al.）。収入の低い階層の親は高い階層の親よりもブログやソーシャルネットワーキングでしばしば IT を使用し、高い階層の親は低い階層の親よりも情報検索で多く IT を使用するとのことが明らかにされた。

他にも、韓国家族における研究で、親と子どもの学業期待の役割に父親においては IT 使用の効果があるとする研究（“The Effects of Internet Use on the Relationships with Fathers among South Korean Families: The Role of Parental and Child's Educational Expectation” presented by Kim, S.）、親が家族とのコミュニケーションに IT を使用することにおいて子どもの年齢によって相違があるとする報告

（“Parents' Technology Use for Family Communication: Differences by Child Age” presented by Weigel et al.）、メールによって家族のコミュニケーションをはかることはアルツハイマーに罹った家族に対して日常的なケアになるという報告（“Informal Care of Alzheimer's: Family Communication by Email” presented by Grasse-Bachman et al.）、母親の新しいメディアの使用としてブログを行うことは母親としての幸福を増加しているのかどうか（“New Mothers' Media Use: Could Blogging Increase Maternal Well-Being?” presented by McDaniel et al.）などの報告がなされた。他にも、IT に関する研究が行なわれており、カップル、親子、階層、病気などの多様な視点で IT の研究が行われていることがわかり非常に勉強になった。よって、今後の IT に関する研究を継続する上での課題につなげたいと考えている。

3.2.2 夫婦に関連する研究の概要

Marriage and Marital Quality のセッションでは、結婚生活の中で、男女ともに平等に愛情表現を行うけれども、女性是否定的な考えを抑止することによって愛情を表現するが、男性は妻と一緒に家事をすることや娯楽活動を行うことによって愛情を表現する傾向があるという研究報告がなされた

（“Do Men and Women Show Love Differently in Marriage?” presented by Bredow et al.）。次に、結婚継続とともにいかに結婚の質が変化するかという理解を深めるために、1980 年に結婚 3 年以下の夫

婦に 20 年に渡って結婚における幸福、問題、葛藤、相互作用などの変化を調査した研究においては、結婚における様々な様相において、結婚の質は U 字型や継続的減少という期待された軌跡を提示せず、結婚継続とともに共変するという理解を深めることにつながっていることが報告された (“Marital Quality across the American Life Course” presented by James et al.)。

また、新たに結婚した夫婦 610 組を 3 時点で調査した結果、1 時点で結婚満足度が高い夫婦は、2 時点においてより高い結婚の信頼が好意的な行動を増加させ、3 時点においては夫と妻双方の結婚満足度を高めていること、さらに好意的な行動のより高いレベルは、関係満足度を増加させ、妻の行動が夫の満足度を形成することが報告された (“Marital Confidence, Positive Couple Behaviors, and Marital Satisfaction” presented by Johnson et al.)。

他にも、関係性の質の予測や安定性の観点から、子どもをもち親となっている夫婦と親となっていない夫婦は、結婚の軌跡が本当に違うのかという研究報告 (“Marital Trajectories of Parents and Nonparents: Do They Really Differ?” presented by Durtscho)、イランの自称幸せな夫婦と成功的といえる結婚の要因や (“Self-described Happy Couples and Factors of Successful Marriage in Iran” presented by Dadras et al.)、中国の仕事満足度における結婚の質の効果はどう作用しているかなど研究報告もなされた (“The Effect of Marital Quality on Work Satisfaction in China” presented by Chiu et al.)。

Couples' Programs のセッションの中では、TOGETHER という財政的結婚の緊張に取り組む夫婦の能力を改良するためのプログラムについて、第一部ではプログラムの内容が書かれ、第二部においてはこのプログラムの効果を評価するとパイロットテスト研究で述べられていることが報告された (“TOGETHER-A Couples' Program for Managing Financial and Marital Strain” presented by Hayhoe et al.) また、子ども福祉事業員は、苦痛を感じている結婚や家族の関係性に対する働きかけの仕方を用意しているが、健全な関係性と結婚教育に焦点を当てることを欠落していることを指摘し、関係性を改良するための知識を持つことが彼らの仕事の改良につながるとの報告もなされた (“Child Welfare Workers' Attitudes and Views toward Relationship and Marriage Education” presented by Schramm et al.)

最後に、健全な関係性と結婚を形成し維持するための助けになっている政策的ツールとして用いられている結婚と関係性教育(MRE)の効果について、現在、収入の低いカップルに焦点を当てて知りえている包括的なレビューの発表がなされた (“What Works in Marriage and Relationship Education? A Comprehensive Review of Lessons Learned with a Focus on Low-income Couples” presented by Hawkins, A. J.)。このように、多様な文化圏に渡る Marital Quality の研究成果に触れることができたこと、アメリカにおいては、健全な関係性や結婚に対する教育プログラムなどがあり、収入の低い階層における重要性など、結婚の質や人種、階層などからの多様な研究視点を学ぶことができ、研究視点の広がりにつながった。

3.2.3 父親・家族・養育行動に関連する研究の概要

Fathering in Context のセッションでは、日本においてはあまり研究報告がなされないゲイの父親の観点から発表や、アフリカ系アメリカ人に関する研究報告が多く行われていた (“Why Parenthood?: Gay Men's Motivations for Pursuing Parenthood” presented by Downing et al. : “Gay adoptive Fathers' Challenges and Tensions in Balancing Work and Family” presented by Richardson et al. : “Breadwinning, ‘New Fathers, and the Package Deal in the Great Recession” presented by Pacholok et al.)。また、離婚が多いアメリカらしく、離婚した父親の新しいパートナーが、同居していない子どもに対する父親のかかわりにどのように影響するのか、父親のパートナーを新しい友人と称するなど、多様な視点での研究報告が多かった (“Daddy's Got a New ‘Friend’: Does a New Partner Influence Father Involvement with Nonresident Children?” presented by McClain, L. R.)。

さらに、養育行動に関しては、青年期を扱ったセッションが多く見受けられ、Parenting Behaviors and Adolescent Well-being across Cultures や Adolescence, Childhood, Child Development and Socialization, Siblings, Family Relationships などのセッションでは、父親と母親のえこひいきによる成人後のきょうだい葛藤の問題や (“Differential Effects of Perceptions of Mothers' and Fathers' Favoritism on Sibling Conflict in Adulthood” presented by Suitor et al.)、若者の発達における母親・父親の支援と葛藤における研究報告 (“Maternal/Paternal Support and Conflict in Relation to Latino Youth Development” presented by Ferber et al.)、親の教育期待が家族関係の予測につながるとした研究の報告がなされていた (“Family Relational Predictors of Parental Education Expectations” presented by Weiser)。

以上から、本調査において、学会発表における活発な質疑応答を行ったことや、海外の研究者の発表を様々な角度から調査して研究成果を収集し、IT と家族、父親研究の動向、夫婦関係や親子関係で

取り上げられている課題を把握したことで、本調査の目的を達成できたと考えている。

4. 今後の研究計画と展望

今後の父親の IT 利用に関する研究計画としては、日本の父親と同様の調査票内容で、アメリカの父親に対して調査を行っており、日米比較分析を行う計画である。また、IT 利用と家族、父親の子育て参加や夫婦関係の視点の研究においては、人種の問題や社会構造的・文化的に多様性があるアメリカで得られた知見を、日本の社会的実情に照らし合わせた研究課題として焦点化していくことが必要であると考えられる。

以上、海外の学会に参加して発表を行うことは、アメリカにととまらず、世界中の国々から参加する研究者たちに、日本人として研究成果を紹介することで、国際的な女性リーダーの育成につながるものと考え、NCFR などの国学会発表の重要性を大いに感じた次第である。海外の研究者たちが、グローバルで多様な視点から新たな研究を行い、理論の発展や実践の可能性を拡張していく姿勢は、非常に興味深く、研究上大変良い刺激を受けたと考える。よって、今後も、海外の進歩的な研究を肌で感じるためにも英語による学会発表や英語論文の執筆によって海外に研究成果を発信し、国際的な女性研究者として成長するべく努力する所存である。

その意味においても、本プログラムの支援によって NCFR 学会に参加し、国際的な研究成果を調査収集し、研究者たちと質疑応答する中で人脈を築くことにつながったことに対して、関係スタッフのご協力とご理解・ご尽力に深く謝意を申し上げたい所存である。また、報告者が博士論文で引用しているアメリカの父親研究の大家の先生方と知り合うことができたことは、本調査の大きな成果の一つであり、ご紹介くださった石井クンツ昌子教授にこの場を借りて心より御礼申し上げたい。今回の学会の発表や調査で得られた成果は、日本家族社会学会や家族関係学部会、NCFR 学会の発表の場において、さらに、査読論文の形で公表するとともに、現在執筆中の博士論文の一部として組み入れ、本海外調査研究の成果とする予定である。

参考文献

- 佐々木卓代 (2009a) 「子どもの習い事を媒介とする父親の子育て参加と子どもの自己受容感：スイミングスクールを対象とした調査から」『家族社会学研究』21(1): 65-77.
- 佐々木卓代 (2009b) 「父親の子育て参加と子どもの親和性」『家族関係学』28, 43-55.
- 佐々木卓代 (2010) 「子どもの習い事へのかかわりを通した父親の成長と子どもの父親評価」『子ども社会研究』16, 31-44.
- Sasaki, T. (2011a) "Parental Involvement and Children's Perception of Competence: From Gender Perspectives" *Applied Ethics*, (Ed.) Center for Applied Ethics and Philosophy, 199-212.
- Sasaki, T. (2011b) "Japanese Mothers with Young Children and Internet Use: Husband' Child Care and Housework, and Marital Quality" *Proceedings of the 3rd Next-Generation Global Workshop Migration* (Kyoto University), 575-587.

ささき たかよ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 ジェンダー学際研究専攻

指導教員によるコメント

佐々木さんは、現代日本社会において重要視されている父親の子育て参加に対して様々な視点から研究を行い、父親の子育て参加が、子どもにどのように影響し、夫婦の関係性とどう関連し、父親自身の人間的成長を促進するのかを解明することを主な研究目的として博士論文に取り組んでいる。また、近年の急速な IT 普及が、家族・夫婦・親子関係にどのように影響するのかに対しても重大な研究関心を持ち、今回の NCFR 学会において父親の IT 利用と子育て参加・夫婦関係の発表を行ったことは、日本の研究者として海外で研究発信を行う貴重な経験の積み重ねとなったと考える。特に、父親の子育て参加において夫婦の関係性を重要視している佐々木さんにとって、今回の NCFR 学会の発表で夫婦関係と子育てに関する活発な質疑応答が行われたこと、夫婦関係に関連する他の発表者の研究を調査し多くの示唆を受けたことで、今後の博士論文に対してかなり意義深い学会となったと確信している。さらに、博士論文に使用している理論の研究者たちとも知り合えたことは、今後の研究の発展につながり、学会参加のメリットといえる。以上から、本助成を頂き、海外における学会発表と調査研究を行ったことは、研究者同士の人脈を築き、佐々木さんの父親研究における夫婦の関係性の視点がグローバルなものとなり、博士論文執筆に向けて重要な進歩となったことと、今後も IT と家族・

父親の子育て参加の研究を継続する上で非常に高い成果を収めたことを評価することができる。
(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (人間科学系)・石井クンツ昌子)